The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 社交術と「啓蒙」 : クニッゲ『人間交際術』にみられる処世と啓蒙の関係 |
| Author(s) | 中, 直一 |
| Citation | ドイツ啓蒙主義研究. 2002, 2, p. 25-37 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/73812 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 社交術と「啓蒙」

## ― クニッゲ『人間交際術』にみられる処世と啓蒙の関係 ―

中　直一

### 1　『人間交際術』の二つの側面

1788年に初版の出たクニッゲ(Adolf Freiherr von Knigge, 1752-96)の『人間交際術』(Über den Umgang mit Menschen）は出版直後から版を重ね、１８世紀後半から１９世紀にかけての「ベストセラー」[1]になった書物である。初版出版からおよそ100年後にあたる、1884年から88年にかけてドイツに留学した森鴎外も、1878年版のレクラム文庫で『人間交際術』を読み[2]、帰国後小倉時代に「知恵袋」と題してクニッゲの書物を活用しつつ交際術の論を著した[3]。また文化史家フリーデルは1928年に著した『近代文化史』第３巻の中で、「ドイツ啓蒙主義の最も著名なこの書物は、今日でもあらゆる人から引用される価値があると言ってよいだろう」[4]と述べている。初版出版から200年以上たった今日なお、レクラム文庫やインゼルのポケット文庫に『人間交際術』は収められている。また「クニッゲ」の名は、１８世紀の著述家の一人を指す固有名詞としてのみならず、今日にいたるまで「作法書」の意味で普通名詞として使用されることがあり、たとえば最近出版されたドイツ語の話し方の指南書はSprach-Knigge という標題を有している[5]。

こうして『人間交際術』は、人間心理の機微を記した書物として、時代を超えて読者を獲得しているわけだが、他方、同書は１８世紀ドイツという、地域と時代の刻印を色濃く帯びているという側面もある。それは目次を見るだけでも十分に推測される。たとえば同書第３部には「身分の高い人、君侯、貴族、財産家との交際について」あるいは「宮廷人およびそれに類する人々とのつき合い方」という章があり、君侯や宮廷が存在した時代ならではの社交術が書かれている。このような部分は、もちろん今日ではそのままでは通用するものではなく、むしろ同書は１８世紀ドイツ社会の在り方を知るための、重要な資料的価値のある文書であると評され得る。たとえばフェッチャーは「『人間交際術』のテクストは、第一級の文化史的資料を提供するものである。この書物が著された時代の背景と、この書物の著者の政治的意図に基づいてのみ、クニッゲの書物の意義が明らかになる」[6]と述べている。

クニッゲの『人間交際術』は、上記のように時代を超えて読み継がれる側面と、１８世紀ドイツの在りようを示す資料的側面の二つを併せ持つわけだが、本論文ではその後者に着目する。１８世紀後半のドイツ、啓蒙についての論議がかまびすしかった時代のドイツにあって、社交術の指南書がいったいどのような立場をとっていたのか、それが本論文の出発点である。すなわち１８世紀の社交術の書物において「啓蒙」がいかに位置づけられているのかを考察することが、ここでの課題である。

一般に社交術の書物といえば、さしあたりは当該社会のありようを前提とし、それをひとまず是認した上で、いかにしてその社会の中で人が不都合なく生きてゆけるかを指南したものであると解されよう。社交術の指南書が社会の変革を求めるものである可能性は非常に低く、社会の現状にあわせて自己を巧みに律することを教えるものであると考え得る。

他方、啓蒙とは何か。これは一概に言えない問題であるが、仮にカント流に「自らの責による未成熟状態から脱すること」と定義づけるとすると、啓蒙とは当該社会の革命的変革を求めるものではなく、先ずもって自己および世人の意識改革を求めるものであると考えることが出来る。しかしながら、他面では「啓蒙」には、蒙昧にまどろむ一般人の意識を知識人が喚起して社会のさまざまな矛盾に目を向けさせ、社会的変革を直接に求めるという含意もある。

カントの「啓蒙とは何か」（1784年）の4年後、そしてフランス革命の前年の1788年に『人間交際術』を書いたクニッゲは、いったいどのように「啓蒙」を把握していたのであろうか。社交術と啓蒙はいったい彼の中でどのように連関していたのであろうか。筆者は以下に、『人間交際術』のもつ１８世紀文化史の一資料としての側面から、クニッゲの著作にあらわれた「啓蒙」を考察して行きたい。

## 2　「啓蒙」へのイローニッシュな視点

クニッゲの墓誌銘には「市民の友、啓蒙家、民衆の教育者」と刻まれているという[7]。後に述べるようにクニッゲはフランス革命が勃発すると、これを支持する書物を著し、その著作は反革命的人士からきびしい攻撃を受けた。この事から考えると、われわれは『人間交際術』の中に、啓蒙主義を支持する著者クニッゲの改革志向的論述を期待できそうである。

しかし案に相違して、『人間交際術』においては「啓蒙」は非常にイローニッシュに扱われている。たとえば、老人と若者の交際術を説いた第２部第１章「世代の異なる人間同士の交際について」のなかで、クニッゲは当代の若者が年長者を尊敬しなくなった点を慨嘆して次のように述べている。

> 先入観をきれいに洗い流した、啓蒙化された(aufgeklärt)私たちの時代にあって、母なる自然が与えてくれた多くの感情が、理知的なものに置き代えられてしまった。年上の人間に対する尊敬の気持ちも、このような感情のひとつである。（2-1-5/ S.155）[8]

クニッゲは、たんに今風の若者を非難しているのではなく、ことさらにそれを「啓蒙」と結びつけて論じている。つまりクニッゲは、無軌道な若者について慨嘆しているのではなく、啓蒙の普及した時代の若者について慨嘆している。すなわち彼の批判の矛先は、なかば若者に向けられていると同時に、なかば啓蒙化された時代そのものにも向けられている。

ここでの啓蒙、それは先入観がきれいさっぱりと洗いおとされた(von Vorurteilen so

säuberlich gereinigt)ものとされる。上に引用した箇所に続けてクニッゲは、新聞や書物によって若者がさまざまな知識を得、そのことによって自信を持つと同時に尊大な自己意識をも持つに至ったと論じている。経験によらずとも書物からの知識によってさまざまな判断を下すことになった時代を、クニッゲは批判の俎上にのぼせているわけである。

既存の人間関係に批判のまなざしを向けることが「啓蒙」であるとすれば、クニッゲはこのような啓蒙に対して懐疑の念を抱いていると言える。このことは、隣人および家庭内に同居する人（Hausgenosse）との交際についての章にもあらわれている。クニッゲは、家族関係についで隣人および仲間との交際を重要なものと考えて、次のように述べている。

> 最近のわれわれの哲学は、この親密な人間関係を超越してしまっている。しかし私は、この人間関係を超越するほど十分に啓蒙化されていない(nicht aufgeklärt genug)。それゆえ確信をもって次の文章を書き下す次第だ。すなわち「汝は、汝の家族の次には、先ず第一に汝の隣人と仲間にたいして、助言を与え行動を示し助力をなす義務がある」と。(2-8-1/ S.255)

ここでの「最近のわれわれの哲学」とは、当世流行の哲学というほどの意味であって、クニッゲが与するものではない。クニッゲは、社会に現にある人間関係の秩序を一気に超越する立場を、「われわれの哲学」すなわち「啓蒙化された」哲学的立場と見なして、それに対して同調しない、あるいは皮肉な目を向けている。

既存の価値体系と啓蒙とを対立的に把握するクニッゲの見方は、上に見たような人間関係のみならず、身分制といった領域にも及ぶ。ここでもクニッゲは啓蒙を、現存の秩序に対する破壊者として捉え、こうした啓蒙的知性を強烈に皮肉る。

> 幸いなる１８世紀よ。この時代に、どれほど多くの御立派な発見がなされたことか。例えば、本の読み方を学ぶべく、文字を知っている必要がない、あるいは、万人を愛するためには、一人一人の人間を愛してはならない、といった発明だ。万能の妙薬の世紀よ。博学の士、人類愛の士、錬金術師、そして世界市民の世紀よ。いったい汝は、私たちをこれ以上どこへ連れて行こうとするのか。私は、普遍的な啓蒙(allgemeine Aufklärung)が、ありとあらゆる身分の人に行きわたるのを目のあたりにしている。私は、農民たちが面倒臭そうに鋤を放り投げ、領主の前で身分平等論と生活費用共同分担論を演説して聞かせるのを見る。私はすべての人が、自分にとって不都合な考えを、理屈を付けては先入観だとして排除するのを見る。〔……〕いやはや、まことに慶賀すべき黄金の時代になったものだ。(2-2-1/ S.161f.)

全体の論調は先に引いたものと同じであるが、この引用文で注目すべきは、クニッゲが領主に対する農民の抵抗思想を、普遍的啓蒙の普及の結果として捉え、しかもこれを否定

的に捉えているという点である。もちろん、この引用文全体としては、身分制云々が直接の主題となっているわけではなく、むしろクニッゲは、抵抗思想を含む諸々の１８世紀的思潮全体を揶揄しているのであるが、われわれとしては、クニッゲが旧来の身分制度を否定する考えに対して懐疑的であったことを確認しておきたい。

身分制度については、もう一箇所例を引こう。そこではクニッゲは、啓蒙の過剰がもたらす社会的混乱の可能性を指摘している。

> 彼ら〔＝農民〕にさまざまな書物や物語、寓話を手に取らせること。あるいは彼らに、観念の世界に身を置く習慣をつけさせること。或いは彼らの目を開かせて、改善の見込みのない彼らの悲惨な状況を目の当たりにさせること。あるいは、過剰な啓蒙によって(durch zu viel Aufklärung)、彼らをして自らの境遇に不満を抱かせ、富の不平等について熱弁をふるう哲学者にさせてしまうこと。あるいは、彼らの習俗を、如才なさやうわべだけ洗練された礼儀正しさを備えたものにしてしまうこと ― こうしたことは実に無意味なことである。(3-6-9/ S.409)

クニッゲは啓蒙の度が過ぎると、農民が現状に不満を持つようになると論じている。この文脈で考えるならば、過剰な啓蒙は社会の現秩序に対する不安定化の要因をなすものとなろう。社交術が社会の現秩序を前提とし、その中での人間の振る舞い方を指南するものである以上、社会秩序の不安定化を促進する要素について懐疑的であることは当然予想されるが、われわれとしてはクニッゲがことさらに、不安定化の要因を「啓蒙」と結びつけている点に注目したい。

### 3　伝統的価値規範と社交術

このように「啓蒙」の語を使用している箇所を見てくると、クニッゲが自らを反啓蒙家と任じていたのではないか、と判断し得るように思われる。たしかに彼が『人間交際術』の中で Aufklärung の語を使用するとき、そこには非常にイローニッシュな、揶揄するような響きがある。

すでに紹介したように、クニッゲの墓誌銘には「啓蒙家」と記されている。このような評価はいったどこから出てきたのであろうか。彼の著書の中で最も多く読まれた『人間交際術』で、クニッゲはあきらかに啓蒙に対して懐疑的なまなざしを向けている。にもかかわらず、何故クニッゲは後世の評価において啓蒙家とされるのであろうか。

以下、本論文では「啓蒙」の語を使用していない部分で、クニッゲがどのような思想を示しているかを考察しよう。

まず男性と女性の役割について、クニッゲがどういう立場を取っているかを見よう。彼は男性を「自然および公民法によって、家長であるように定められている」(2-3-9/ S.179)

と述べている。すなわち、男性が家長であることは、いわば先天的に定められているのみならず、後天的にも法律によって規定されている、と論じている。また彼は別の箇所で、夫婦の役割分担について面白おかしく「妻が夫のかわりに君主宛の報告書の草稿を書いてあげる、そのかわり夫は、来客がある日には自ら鶏を焼いて料理し、クリームを作り、娘に服を着せてあげなければならない、というような家庭が、うまくいっている家庭であるということはまれなのだ」(2-3-12/ S.183)と述べている。このような文章を目の当たりにすると、クニッゲが伝統的な男性観女性観にのっとり、いわば男性は男性らしく、女性は女性らしく生きよ、という処世訓を述べているように見える。

ところが『人間交際術』を注意深く読むと、クニッゲが巧みに予防線を張っていることに気づく。つまりクニッゲは、一方で伝統的男女間に基づく処世訓を述べながら、別の箇所では、女性の方が男性より優れている面を持つと主張することを忘れない。

> 聡明な女性は、社交生活の中で女性がどのように振る舞うべきかという問題について、最良の智恵を同性の人々に伝授する能力を持っている。これは、とても男性には真似の出来ないわざである。(1-1-63/ S.86)

この文章は第1部第1章の最後の節に掲げられた文章である。これ以前の部分でクニッゲは、さまざまに社交術を述べ、そこでは女性を伝統的役割に服するように求める書き方を多く為しているのだが、このようなことを論じた章の最後の部分でクニッゲは、本書は女性のための本ではない、なぜなら女性のための社交術を書こうとすれば、もっと大部の著作が必要になろうし、そもそもその様な書物を必要としないくらい、女性は独自の社交センスを有しているのだ、といわばドンデン返しのような論じ方をしている。

ここからわかるように、クニッゲは男女の伝統的な役割分担を支持しつつも、かならずしも女性を男性に比して価値低きものとしているのではなく、むしろ開明的・非伝統的な考え方をも併せ提示しているのである。

宮廷や貴族に関するクニッゲの発言をみれば、伝統的な身分制を揶揄するような思想が示されていることに気づく。たとえば宮廷人(Hofleute)について、クニッゲは次のように述べている。

> こうした軟弱なる世俗人は、あたかも風になびく柳のようなものである。彼ら自身、自分の内面に価値があるなどとはほとんど意識していない。それゆえ彼らは、外面の評判に全存在をかけるわけだ。(3-3-10/ S.351)

ここに「軟弱なる世俗人」と訳したが、原語は die feinen Weltleute である。「風になびく柳」（仮にこう訳したが、原文は"ein Rohr, das vom Winde bewegt wird"であるから厳密に言えばアシである）のように、あちらの世評を気にし、こちらの世評になびく、要するに

自己の内面的価値に確乎たる自信を有せぬ存在として、宮廷人が把握されている。

宮廷人や宮廷そのものに対するクニッゲの論は、さらに激烈なものに進む。ほとんど宮廷を嘲笑するかのごとき文章さえ、われわれは『人間交際術』の中に発見することが出来る。

> 宮廷や、そのほか貴顕の世界で生きてゆくように呪われていない人がいる。そのような人は、宮廷世界という、あの輝かしいばかりに悲惨な見せ物小屋から、よろしく身を遠ざけるべきである。精神と心理を麻痺させ、狂わせ、破壊してしまう、あのドタバタの場から遠ざかるべきである。(3-3-2/ S.343)

こうして１８世紀ドイツ社会の上層にある宮廷人に対して極めて皮肉な発言を行うクニッゲだが、他方社会の下層に位置すると目されていた農民階級に対して、彼はどのように述べているのであろうか。

> ドイツのほとんどの地方において農民は、一種の抑圧と奴隷状態のなかで生活している。その状態はしばしば、他国の農奴よりも実に過酷である。〔……〕幸運にも誰かが天の配剤によって、これほど抑圧され、しかもこれほど重要で有益な階層の苦しみを取り除く状態に置かれたとする。そのような人は、甘美なる喜びをもって、農民たちのささやかな家々に喜びを分配し、そのことによりおのれの名声を子々孫々にまで伝えるがよい。(3-6-9/ S.408)

この文言はかなり過激であるといってよいだろう。クニッゲは、ドイツにおける農民の窮状を指摘しつつ、それのみならず、このような社会体制を変革する人士の登場をも求めている。この文章のみを読めば、彼が、よしや革命を希求するものでないとしても、現状に対する政治的改革を求めていたのではないか、と推測し得る。

ここでわれわれが注意しなければならないのは、『人間交際術』があくまでも社交の術を説いた書物であって、決して体系的な学術書ではないということである。つまり、そこに厳密な首尾一貫性を求めることは、もとより無理である。『人間交際術』においては、ある部分での主張と抵触するような発言が、別の箇所で見られる、ということがある。それゆえ、上記の引用文のみをもって、クニッゲの政治的立場を云々することは、かえって危険であろう。実際、クニッゲは上記の引用文のすぐ後の所で農民階級のことを「意固地で、喧嘩好きで、反抗的で、恥知らずな連中」(ibid.)と述べ、農民の悲惨な状況に同情の念を寄せている当のクニッゲが、他方で農民に対して冷ややかな見方をも示している。

『人間交際術』がそのような性質を持つ書物であることをふまえた上で、われわれは、クニッゲの立場がどのようなものであるのかを考察したい。前節で見たようにクニッゲは、およそ「啓蒙」に対して懐疑的な姿勢を示していた。しかし本節で見たように、実際の社

交術を述べた文章を分析すると、クニッゲが伝統的価値体系に依拠して論述をなしている部分と、伝統的価値体系そのものに対して疑念を提している部分の両面があることに気づく。社交術を説く書物であるからには、既存の因習や人間関係、あるいは身分秩序などをひとまずは前提にするのだが、たんにそれにとどまらない論述が『人間交際術』には含まれている。

仮に啓蒙というものを、既存の価値規範を無前提・無批判に受け入れる事への懐疑の意識であると把握し得るとすれば、クニッゲの『人間交際術』には、まさしく啓蒙的要素が存在すると指摘し得る。すなわち、あれほど「啓蒙」を揶揄し、否定的に取り扱うクニッゲの論述の中に、今日のわれわれから見ればきわめて啓蒙主義的理念に裏打ちされた思想がこめられているのである。

繰り返しになるが、クニッゲの『人間交際術』は学術書でなく、むしろ広範な読者に受け入れられることを念頭に置いた書物である。それだけに、一面で農民の窮状に同情を示しているかと思えば、他面で農民の日常を非難する。また宮廷を徹底的に揶揄しているかと思えば、その章の最後の節で「さて本章を締めくくるに当たり、貴顕の世界にいる人々との交際が私たちにもたらす利点について述べたい。実際そのような人々との交際は、くだらないものではない」(3-3-14/ S.355)と、今まで述べたことを帳消しにするかのような弁明をしている。

したがって、クニッゲの発言の一部を取り出して彼の思想の全体像を云々するということは危険である。むしろ前後で矛盾・抵触するような発言が存在するということをふまえた上で、われわれはクニッゲの思想を解明しなければならない。

## 4　クニッゲの人物像

このように『人間交際術』において、「啓蒙」については懐疑的な態度が示されているものの、社会体制については、これに批判的な言葉も見られた。このように単純一様でない内容を持つ『人間交際術』を著したクニッゲとは、いかなる人物であったのだろうか。以下に諸種の研究文献によりつつ、クニッゲの人物像について考察したい[9]。

まず彼の出自である。『人間交際術』における貴族や宮廷人の扱い方からは想像しがたいことだが、クニッゲは貴族階級に属し、宮廷に出入りした人物である。彼の名前に Freiherr、すなわち男爵の称号が付いていることからもそれがわかる。ただし父が多額の負債を残したままクニッゲの少年時代に死去したため、彼の生活は非常に苦しいものであったようである。

クニッゲが生活の資としたものは何か。クニッゲは 1772 年から 75 年までカッセルで、そして 1777 年から 80 年までハーナウで、それぞれ宮廷人として生活していた。現代風に言えば、宮廷という職場において、宮廷官吏としての職務を行い、その俸給が彼の生活を支えていた。ただし彼は、当時の宮廷でしばしば見られた派閥次元の抗争にまきこまれて、

カッセル、ハーナウのいずれにおいても数年の奉職の後、その宮廷を後にしている。クニッゲの『人間交際術』にみられる宮廷人批判（というより、罵詈雑言に近い扱い）には、自らの宮廷体験が反映されていると言えよう。

宮廷を離れたクニッゲが生活の資としたのは、文筆家としての活動からの収入である。文筆家としてのクニッゲについて、「彼はドイツにおける最初の独立した文筆家のひとりであり、そして確かに、彼の著作の多くは、金銭のために書かねばならないという強迫のもとにあった」[10]という評がある。ブリュフォードによれば、「１８世紀前半のドイツには文筆家の名に値する職業は存在しなかった」[11]のであり、その意味でクニッゲは、１８世紀後半のドイツで成立しつつあった著述業の、最初期の一人であった。クニッゲは、出自としては貴族であるが、文筆業なる職業に従事したことから判断し得るように、一面で市民的な感覚をも身につけていた人物であると言えよう。彼の著作には、自伝的小説、旅行記、政治的文書などがある。『人間交際術』をのぞけば、いずれも今日では読まれることがなく、文学史上の扱いも極めて低い。

１８世紀文化史の中でクニッゲの名前が登場するのは、彼の作家としての活動の面ではなくて、むしろ啓明会（Illuminatenorden）との関連である[12]。クニッゲは宮廷に出入りしていた当時より、カッセルにおいても、またハーナウにおいてもフリーメーソンに入会していたが、ハーナウの宮廷を離れてのち、ヴァイスハウプト(Adam Weishaupt, 1748-830)が創設した啓明会に入った。

啓明会についてフェッチャーは、「この秘密結社の志向するところは、彼〔＝クニッゲ〕によれば、啓蒙と寛容の普及、専制主義との闘争および、会員の相互扶助であった」[13]と述べている。啓蒙を標榜する政治的な活動を志向する団体であったことがわかるが、クニッゲは当初、１日のうちの１６時間を啓明会の活動に捧げるほどの熱中ぶりを示した[14]。だが、クニッゲはのちにヴァイスハウプトと対立して、同会を離れている。

『人間交際術』は、クニッゲがフリーメーソンないし啓明会の活動から身を引いた後に書かれたものであるだけに、同書の「秘密結社およびそのメンバーとの交際について」と題された章における発言は、非常に手厳しい。

> 私は十分に長い間、このような事柄に従事してきた。それゆえ経験から言えるのだが、時間を大切に思う若者は、どんな名前のものであれ、およそ秘密結社には入らないようにすすめるものだ。こうしたものはすべて、程度の違いはあっても、例外なく無益であると同時に危険なものである。(3-8-1/ S.420)

われわれとしては、クニッゲが秘密結社という存在に対して批判的であるという点のみでなく、むしろ、かつて積極的に関与した事柄に対して、後に厳しい見方を示している、ということに注目したい。宮廷に関しても同じ事で、クニッゲはカッセルないしハーナウの宮廷にいたときには、いわば宮廷の寵児であったが、周囲の妬みゆえに派閥抗争に巻き込まれて宮廷を去った[15]。『人間交際術』で宮廷人を痛烈に皮肉っているクニッゲであるが、自身、かつてはその場の中心にいたのである。つまりクニッゲは、宮廷にしろ秘密結

社にしろ、自己が非難の対象としているものに一切接近することなしにこれを論じているのではなく、むしろ、こうしたものに積極的に関与し、その事柄の中心にいったん立ちながら、袂をわかったのちに、いわば事後的に皮肉な雑言を浴びせるわけである。

これと類似の事は、フランス革命に対するクニッゲの態度にも表れていると言えよう。フランス革命勃発のちょうど1年後、1790年7月14日ハンブルクにおいて開催されたフランス革命1周年を祝う集会に、クニッゲは参加している。その様子をクニッゲは娘に宛てた手紙のなかで「私、ドーナ伯およびツェレのラムドアの他には、貴族は誰ひとりとして — 君侯の奴隷は誰ひとりとして — そこには招待されていませんでした」[16]と述べ、さらに「すばらしい一日でした。多くの人が感動の涙を流していました」[17]と、当日の模様を伝えている。この文章からわかるようにクニッゲは、自ら貴族階級に属しながら、フランス革命が勃発すると貴族階級を「君侯の奴隷」とみなし、革命に賛同する姿勢を示したわけである。

『人間交際術』の初版は1788年に出版され、同年第2版が出た。そして大幅に増補改訂された第3版が出版されたのが1790年である。つまりフランス革命を間にはさんで改訂がなされたのであるが、それがどの程度の改訂であったのか、厳密なことはわからない。クニッゲ自身、初版と2版のまえがきに加えて、第3版で別のまえがき(Vorrede zu dieser dritten Auflage)を書いているが、そこでは「注意深い読者は、最初のふたつの版に比べて、配列の点でも内容自体の点でも、私がこの第3版でどれほど多くの変更を加えたかを見出すであろう」(S.3)と述べているのみで、具体的にどの箇所を増補したのかについては言及していない。

ケーディングによれば、第3版で「君侯との交際について」の章が増補されたということである[18]。この「君侯との交際について」は『人間交際術』の第3部に含まれているが、この第3部には「農民との交際について」あるいは「宮廷人との交際について」などの諸章も含まれている。つまり上に引用したような、身分制の現状に対する批判的言辞をふくむ文章の多くが、この第3部に収められている。またフェッチャーによれば、「クニッゲは1790年に、3つの巻で構成された、改訂された形で彼の著作を出した」[19]ということであるから、上に見たケーディングの発言をもあわせ考えると、『人間交際術』は第3版において第3部が増補されたと考え得る。このような書誌的なことは、筆者が現在手にしている資料では、これ以上のことはわからないので、今後の調査にまつとして、現時点では、フランス革命の後に増補・加筆された第3版において、従来の身分制に対する否定的言辞があらわれている、ということを確認するのみにとどめておきたい。

さて1790年にハンブルクでフランス革命勃発1周年を記念する集会に参加したクニッゲであるが、2年後の1792年に、フランス革命を論じた書物『ヨーゼフ・フォン・ヴルムブラントの政治的信条告白』(Joseph von Wurmbrands politisches Glaubensbekenntnis mit Hinsicht auf die französische Revolution und deren Folgen)を出版している。この中でクニッゲは、フランス革命は数十年にわたる財政破綻と特権階級保護政策がもたらした必然的なも

のであると論じ[20]、フランス革命に共感を示す。そのフランス革命擁護のゆえに、クニッゲは「革命の伝道者であり、民衆の扇動家である」と非難され[21]、また彼の出身地のハノーファーの将校団の憤激をかって、官吏たるもの（当時クニッゲはブレーメンの宮廷官吏になっていた）がこのような書物を書くとは許されがたいことである、との攻撃を受けた[22]。

とはいえクニッゲはドイツにおいてもまた革命の生ずることを期待していたわけではない。むしろその逆であった。クニッゲはプロイセンのフリードリヒⅡ世という模範的君主を有するドイツ諸国においては思想信条の自由が保証されており、暴力的革命をもって政府を転覆する必要性はない、と論じている[23]。すなわちフェッチャーが指摘するように「ドイツにおいても諸々の改革は必要だが、それは有効な改革の過程をへてなされるであろう、とクニッゲは期待していた」[24]のである。すなわちクニッゲは、フランス革命に賛意を表しながらも、革命をドイツに直接導入することは求めなかったのである。

以上、本節でわれわれはクニッゲの人間像に関し、おもに宮廷、秘密結社およびフランス革命との関連を調査した。彼の実際の行動をみると、その墓誌銘で「啓蒙家」とされていることも、一面では首肯され得る。啓蒙の普及をめざす啓明会に所属していた点や、フランス革命に心酔した点を見ると、クニッゲは１８世紀ドイツの「啓蒙」の時代思潮の中に生きていた人物であると目される。また上に見たように、『人間交際術』には現体制への批判的言辞が含まれていた。その批判的言辞は、筆者の目から見ると、まさしく啓蒙家的である。つまりクニッゲは、実際の行動においても、また『人間交際術』の論述においても、啓蒙家としての側面を有していた。

しかし他面においてクニッゲは、自ら宮廷に属することを欲した貴族であり、またドイツにおいて革命の生じることに対しては、これに否定的な態度を示した。

つまりクニッゲは、１８世紀の時代思潮としての啓蒙の文脈で生きつつ、しかもこれとは別の生き方をも示していたのである。そのクニッゲが、なにゆえ『人間交際術』において、こと「啓蒙」という言葉に関しては、これを揶揄するような扱い方をするのであろうか。われわれは以下に、もう一度『人間交際術』におけるクニッゲの発言を調査しよう。

## 5　自律的啓蒙の精神

社交のすべを説いた書物である以上は、『人間交際術』には「～せよ」あるいは「～するな」式の社交規則も、もちろん書かれている。しかし『人間交際術』が時代を超えて読み継がれていった理由の一つに、同書がたんに社交規則を示すのみにとどまるものでなく、むしろ人間関係に対するさまざまな洞察・指摘がそこに示されているということが挙げられる。人間関係が一様でない以上、それについての分析も一様ではあり得ず、『人間交際術』にはさまざまな社交術、さまざまな人間観察が記されることになる。それらは体系的・整合的なものではなく、しばしば互いに矛盾しあう内容をもつ。すでに上に指摘したように『人間交際術』では、前の部分に書いてあることと首尾一貫しないことが、うしろの部

分に書かれていることがしばしばある。したがってこの書物は、読み手によっていろいろな解釈が可能であって、読者は、自分にとって有益と思われる箇所のみを読んでいれば、それなりに得るところがある。

『人間交際術』のこのような性質を、クニッゲ自身はどの程度意識していたのであろうか。筆者の思うに、クニッゲは『人間交際術』が一様の社交術を指南する書物でないことを、かなり明確に意識していたようである。というのも同書のところどころにおいて、各人の生き方は結局のところ各人に委ねられてしかるべきであって、他人が関与・干渉し得ないものである、とのクニッゲの考え方が示されているからである。たとえばクニッゲは、次のように指摘している。

> それゆえ私たちは他人に対し、私たちのやり方に従うように要求することは許されない。むしろ私たちは誰に対しても、その人の進みたい道を進ませるべきである。何を幸福と考えるかは、人さまざまである。だから、本人の意志に反して幸福を無理強いする、などということは、おぞましいことなのである。(1-1-60/ S.84f.)

これは、第１部第１章の最後の方にある「社交規則は万人に適合するものであるか」と題された節における発言である。ここからわかるようにクニッゲは、社交術を指南する一方で、最終的な判断についてはこれを読者自身に委ねている。

このような立場は、蒙昧にまどろむ一般人を覚醒してより高次の世界へと誘わんとする啓蒙（もしも「啓蒙」をこのように捉えてよいとすれば）とは、相容れないものであろう。そうした覚醒化の行動は、啓蒙の名において一つの価値観を他人に強制する、ということにつながりかねない。実際クニッゲは、「啓蒙」それ自体が別の観点から見ればひとつの蒙昧にすぎないものになりかねない、という危険性を指摘して、次のように述べている。

> 他の人にとって価値あるものは、自分もまた尊重しなければならない。自分が言論の自由を求めているのであれば、他の人の言論の自由も認めるべきである。私たちが啓蒙と名付けている当のものが、別の人には、ひょっとすると蒙昧そのものと思われているかもしれない、ということを忘れてはならない。(1-1-31/S. 56)

これは宗教を論じた文脈の中での発言であるので、第一義的には、宗教上の寛容思想を説いたものである。しかしわれわれとしては、むしろ「啓蒙」に対するクニッゲの懐疑の意識の背景に、かかるタイプの「啓蒙」が有する、他者に対する価値規範の一方的な強制、こうしたことがらへの批判意識があったことに注目したい。すなわち、クニッゲは「啓蒙」の立場そのものを頭ごなしに否定的に捉えているのではなく、「啓蒙」の濫用による唯我独尊的価値絶対主義に対して批判意識を抱いていたと考えられるのである。クニッゲは、１８世紀当時のドイツ社会にあって「啓蒙」を標榜する人士への批判意識を有していたが、

啓蒙的思考そのものについては、これを拒絶してはいない。この点については、次の文におけるクニッゲの主張は重要であると解される。

> 私たちの時代においては、啓蒙という言葉はしばしば非常に誤った使われ方をしている。すなわち精神を高貴なものに高めること、という意味で用いられているのではなくて、むしろ、ただの気まぐれや思弁、夢想のための玩具、という意味で用いられているのである。知性の最高の啓蒙(die beste Aufklärung des Verstandes)というものは、私たちに次のことを教えてくれる。すなわち、私たちが現状に満足し、自分が置かれた状況の中で、目的にふさわしい行動をとり、役に立つということである。(3-2-8/ S.340)

あえて図式的に言えば、クニッゲは真の啓蒙と誤れる啓蒙の２種を分けていた。そして『人間交際術』のなかでは、もっぱらその後者の方を指して、しかも何の修飾語もつけないままに、たんに「啓蒙」としてこれを揶揄するような表現を用いていた。したがって外見上、クニッゲが反啓蒙家であるかのような印象を受けるわけである。

上の引用文からわかるようにクニッゲにあっては、人が現状に満足しつつ社会と折り合いをつけながら生きてゆくすべを教えること、これが社交術における真の啓蒙の役割とされる。この意味でクニッゲは、最終的には、『人間交際術』において社会改革を直接に求めない。しかし既に見たように社会改革を希求するかのような現状批判的言辞も、随所に発見し得る。つまりクニッゲは、社交術の指南書という枠内で最終的には現状への適合を説いているのだが、たんにそれにとどまらない、現状批判的なモメントをも有しているのである。

クニッゲが『人間交際術』において批判的に扱う「啓蒙」は、一つの価値観を絶対的に通用するものと見なしてこれを強制する立場であり、またそれを現実社会に適応しようとする立場であった。しかし、だからといって、クニッゲがいかなる現状に対しても無批判に服従することを求めたと考えたとしたら、それは彼の真意を見誤ったことと言えよう。クニッゲは、現状を啓蒙の名において性急に変革することに疑念を示したが、こうした誤れる啓蒙を超越した啓蒙は、むしろこれを支持していたものと考えられる。その意味でクニッゲは、自律の啓蒙を求めていたものと解釈できるのである。

最後にクニッゲの次の言葉を引用して、本論文を締めくくろう。

> 貴方の存在ゆえに、世間の人が貴方に敬意を表してくれるように、貴方は十分に努力すべきである。太陽の光で輝く月や、恒星のまわりをまわる衛星になるよりはむしろ、貴方は、小さくてもよいから自身の光で薄暗い街角を照らす、路傍の街灯であるべきだ。(1-1-5/ S.41)

ここに示された立場は、一見すると「寧ろ鶏口となるとも牛後となる勿かれ」という教

訓と同断であるように見える。しかしクニッゲはむしろ、自らを律して自らに価値を付与する存在を求めていたと考えられる。それが『人間交際術』の最終的な目標であろう。

---

[1] Fetscher, Iring: *Adolph Freiherr von Knigge – Schicksal und Werk eines politischen Schriftstellers*. In: Knigge, Adolph Freiherr von: *Über den Umgang mit Menschen.* Frankfurt a.M./ Hamburg 1962, S.7

[2] 中村ちよ「ドイツ時代の鴎外の読書調査 — 資料研究 — 」〔日本文学研究資料刊行会『日本文学研究資料叢書 森鴎外』(有精堂、1970 年)〕72 ページ。

[3] クニッゲの『人間交際術』と鴎外の「知恵袋」の関係については、小堀桂一郎『森鴎外の「知恵袋」』(講談社、1980 年)を参照。

[4] Friedell, Egon: *Kulturgeschite der Neuzeit*. Ungekürzte Ausgabe in zwei Bänden. München 1976, Bd. 1, S.696.

[5] Ilse und Ernst Leisi: *Sprach-Knigge oder Wie und was soll ich reden?* Tübingen 1992 である。同書邦訳(乙政潤訳、同学社、1997 年)では『言葉の作法(クニッゲ)』というルビ付きの表題を採用している。

[6] Fetscher, a.a.O., S.20.

[7] Rychner, Max: *Adolph von Knigge*. In: Adolph Freiherr Knigge: *Über den Umgang mit Menschen*. Bremen 1964. S. XXI.

[8] クニッゲ『人間交際術』よりの引用は、Adolf Freiherr von Knigge: *Über den Umgang mit Menschen.* Mit einer Einleitung von Max Rychner. Bremen 1964 より行い、引用文の最後にカッコ内に第何部第何章第何節であるかを示し、スラッシュのあとにページを示す。

[9] クニッゲの人物像については、おもに Rychner, a.a.O.および Kaeding, Peter: *Adolph von Knigge. Begegnungen mit einem freien Herrn.* Berlin 1991 による。

[10] Fetscher, a.a.O. S.9

[11] Bruford, Walter Horace: *Germany in the Eighteeenth Century*. Cambridge 1965, p.274.

[12] クニッゲと啓明会の関係については、マックス・フォン・ベーン(飯塚信雄他訳)『ドイツ十八世紀の文化と社会』(三修社、1984 年)130 ページ以下を参照。

[13] Fetscher, a.a.O., S.9.

[14] Vgl. Rychner, a.a.O., S.XXIII.

[15] Vgl. Rychner, a.a.O., S.XVIIIf.

[16] Zitat nach Kaeding, a.a.O., S.255.

[17] Zitat nach Kaeding, a.a.O., S.256.

[18] Vgl. Kaeding, a.a.O., S.252.

[19] Fetscher, a.a.O., S.19.

[20] Vgl. Fetscher, a.a.O., S.11.

[21] Vgl. Rychner, a.a.O., S.XLVI.

[22] Vgl. Kaeding, a.a.O., S.285.

[23] Vgl. Kaeding. a.a.O., S.281.

[24] Fetscher, a.a.O., S.12.